

CNA Report

News & Analysis Focusing On Video / Data Collaborative Conferencing Market

Independent & Unbiased Perspective Since December, 1999

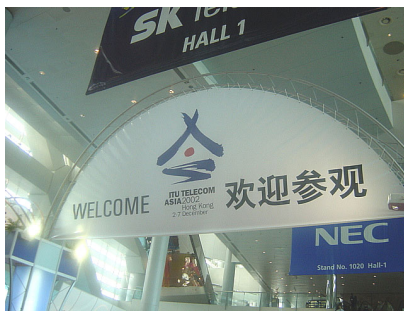
電話会議・テレビ会議・データ会議専門ニュースレター

SPECIAL EDITION 毎月15日・月末発行 創刊1999年12月8日

発行人/編集人:橋本啓介(Keisuke Hashimoto) kay@rr.ij4u.or.jp Copyright ケイ・オフィス All rights reserved.

海外レポート

香港 ITU Telecom Asia 2003 取材



CNA Report 編集

長橋本啓介

2002年12月2日から7日まで香港で開催された ITU Telecom Asia に参加してきた。ITU Telecom Asia は国際電気通信連合のイベントで、香港では2年に一回、ジュネーブでは4年に一度の間隔で開催されている電気通信、IT関係の展示会。日本関係のブースには今回の取材では、テレビ会議などに関係したところは特になかったのですが、目に留まったところでは、NTTドコモが201x年の将来のモバイル環境を描いた映画の放映や結構ステージも華やかにやっていたのを記憶している。華やかさでいけば、韓国のサムサン電子も、3人の女性の音楽の演奏などがあって衆目を集めていた。

いずれにしても、今回の目的は中国市場。コンファレンス(テレビ会議・電話会議・データ会議)市場が中国を中心にどのようになっているのか、また、どのようなマーケットプレーヤーがいて、どのような製品が売られているのか、といったところを調べるために今回香港へ渡航した。

中国でコンファレンスと言えば、それは、「IPテレビ会議」を意味する

結論から言うと、一般的にテレビ会議、電話会議、データ会議の総称として使われている単語である、「コンファレンス」は中国では、「IPテレビ会議」を指すようだ。

中国では、電話会議やデータ会議というよりも、顔を見ながら話をするテレビ会議に対する関心が高い。中国ではIPが非常に早い勢いで広がっているというのはよく聞く話だが、広大な国土も相まって、また急激な経済発展も加わってIPテレビ会議が、非常に

人気が出てきているという印象をもった。

また、ある欧米人が言っていたが、中国でIPの話をしないと誰も相手にしてくれないそうだ。ただ、人気がある関心が高まっているといっても、すでにアメリカなど進んだところの使い方ではなく、単にシンプルに相手の顔のみをみただけでユーザーは満足しているようだ。つまり、さまざまな機能が付いたテレビ会議よりも、一言でいえばエンタリータイプのテレビ会議に、価格も安いということもあって人気があるようだ。

さらに、電話会議については、ほとんど中国人の口からは聞かれなかった。香港やシンガポール、オーストラリアなどは電話会議ではアジアの中では先進的な市場だが、こと中国本土に限ってみれば、電話会議に対する関心は私が今回訪問した限りだと、今のところほとんどないような感じがしたし、それは、展示場を見ても、IPテレビ会議のソリューションを出すところは結構あったが、電話会議ソリューションを出しているところは皆無に等しかった。

中国テレビ会議市場:3500 台市場、ポリコム 30%、中国の華為科技 20%、中国の追い上げ強し

特に数百万円相当のテレビ会議を何台も導入するのは、ある中国人によると、「中国の一般的な企業ではまだまだ高嶺の花。」だが、中国市場では、ポリコムが3割市場を押さえているのではないかとの見方を示していた。その二番手は、20%の中国の華為科技有限公司(Huawei)になる。(華為科技については後説)今後低価格志向が強い中国では当面高めの外国メーカーよりは、廉価な価格で勝負している中国メーカーに需要がながれるのではないかとの見方もあるようだ。ある欧米メーカーに勤務する香港人(中国人には間違いないがここでは分けて考える)によると、「中国大陸の人間達は、高機能を求めるよりも、とりあえず基本的なことが廉価にできればいいというふう考えている人が結構いるので、大きな中国企業でも廉価なソリューションを求めがち、入札では勝負にならないことも結構ある。」「まだまだ、市場が初期段階で出来つつある状況なので、これからが勝負。」「大変厳しい市場だがやりがいはある。」

中国では、電気通信事業者が、多地点接続サービスを提供し

ているが、IPテレビ会議向けしかないような印象だった。ある電気通信事業者のブースにいて、聞いてもIPテレビ会議の多地点接続しかやっていないという返答で、オプション的に多画面分割があるという感じだった。サービスボリュームについてある中国人に聞いたところ、「まだまだボリューム的には少ない」そうだ。

リスクは高いが、いずれにしても中国のコンファレンス市場は今後面白くなる

私が話した中国でビジネスを行なう欧米人や香港人に聞いた話を総合すると、中国市場は模倣されるリスクがあり怖いところもあるが、市場は形成しつつあるところだし、今後国土の大きさ、すごい勢いで成長する産業と経済、購買力が上昇している中国は看過するには非常にもったいない市場で、今後ともさらにコミットを加速していくというのが大半の見方だった。

NECエンジニアリングが最近、14万-27万円くらいのテレビ会議システムの販売を開始したようで、まずは国内市場のみのようだが、外国もいずれ視野に入れるのであれば、まさに中国を狙ってみてはどうかと私は個人的に思った。現状この価格帯は「真空地帯」であったため、私としては、市場の裾野を広げさせることを考えた場合、この価格帯のテレビ会議を市場に投入することは非常によい試みだと思う。日本でたとえば、テレビ電話は安いのだとNTTので6万から7万円だったと記憶しているが、その上のデスクトップタイプで10万円台、そこからローエンドのセットアップタイプの価格の定価で約80万円の間には基本的になにもないのが現状。

廉価版のテレビ会議端末が市場の牽引車になりえる！？

さまざまなブースを回ってみると、電気通信事業者などは、IPブロードバンドサービスのアプリケーションとして、IPテレビ電話などを紹介していたが、そこに使われているのは台湾製のリードテック社のIPテレビ電話だった(確か日本ではNTT-MEが販売していたと思う)。台湾のメーカーでは、リードテック以外にも最近日本に進出してきた、ユニバーサル・インダストリアル社(日本ではネーブルシステム)などは結構廉価なテレビ会議システムを出しているし、イタリアのアエスラ社もこのような中国の廉価志向を取り入れた製品もだしているため、今後中国では当面廉価版のテ



レビ会議のマーケットがホットになってくるのではないかと感じた。

ポリコム・ブースでは

ポリコム社のブースでは、ポリコムオフィスや最近でたIPOWE R9000 シリーズなどが展示されていたが、周さんという北京をベースに中国を担当しているセールスマネージャーにお話を伺う会があった。周さんは、ポリコムが、チャイナ・ユニコム(電気通信事業者)が300台のテレビ会議(ViewstationFXやVS4000)を全省に導入し、また、MCU(多地点接続装置)、(多分アコードのMCUのこと)も各省に全て34台導入して社内でも利用しているという話を説明してくれました。このチャイナ・ユニコムは、今後はこのMCUの機能を社内利用だけでなく、有償のサービスとしても提供していく。

また、周さんによると、現在外国製のテレビ会議システムを中国に輸入した場合は、35%の輸入関税がかかるそうで、これがユーザー価格にも跳ね返るため、ある意味でポリコムブース価格的に不利な面もありえるということも言っていた。今後は中国のWTOの加盟もあるため、徐々に下がっていくだろうとの見方を周さんはしていた。ちなみにFXの中国での価格は、19万9500円からで日本円に直して、約320万円。日本での定価とあまりかわらない感じだ。

アエスラ・ブースでは、公衆テレビ電話、初お目見え！

イタリアのアエスラ社は、ここ10年間で11万台のテレビ会議を全世界に販売しているメーカーだが、今回のITUではポリコムとこ



のアエスラが出展していた。アエスラは結構中国市場で力を入れているようで、北京などにアエスラ中国法人があったり、組み立て工場があったりと、現地化を進めている。同社は、今回のITUだ

でなく、数ヶ月前の北京でのEXPOCOMMや、9月の上海CeBITにも出展して中国重視は非常にはっきりしている。

アエスラはもともと、テレコムイタリアにISDN関係の計測器やモデムなどを納めるメーカーとして発展してきたが、ここ10年ほどテレビ会議を販売している。ブースでは、計測器だけでなくテレビ会議システムも展示しており、今回の目玉は、公衆テレビ電話だった。この公衆テレビ電話は、中国のTZT社という会社との共同開発。写真は、同社ロベルト・ギアマグリ氏が北京オフィスとテレ

ビデオ電話でお話しているところで、回線はISDNの128kbpsを利用していた。回線はIPも利用可能。回線の選択はテレビ電話のダイヤルボタンのところに、IPやISDNなどと書かれているのでそれで選ぶようになっている。

IPテレビ会議、ブロードバンド・インターネットのキラーアプリケーション？



欧米のテレビ会議メーカーとしては、ポリコム社とアエスラ社であったが、中国のメーカーの話の前に、出展していた電気通信事業者、たとえば、ハチソン・グローバル・コミュニケーションズや中国テレコム(写真上)などは、ソフトウェアベースのテレビ会議(電話)ソリューションを展示していた。どれも、いわずもがなIPベースで、ソフトウェアは中国のソフトウェアハウスで開発されたものとのこと。ブロードバンドというストリーミングも想起されるが、ストリーミングよりも、IPテレビ会議のほうがより注目を集めていたような感じであった。また、名前は忘れたが、香港の企業も、ソフトウェアベースのIPテレビ電話を展示していた。ある担当者は、「IPテレビ電話がやはり本命でしょう。」と熱っぽく語っていたのが印象的だった。



ハチソン・グローバル・コミュニケーションズのテレビ電話ソフト



欧米のテレビ会議メーカーとしては、ポリコム社とアエスラ社であったが、中国のメーカーの話の前に、出展していた電気通信事業者、たとえば、ハチソン・グローバル・コミュニケーションズや中国テレコム(写真上)などは、ソフトウェアベースのテレビ会議(電話)ソリューションを展示していた。どれも、いわずもがなIPベースで、ソフトウェアは中国のソフトウェアハウスで開発されたものとのこと。ブロードバンドというストリーミングも想起されるが、ストリーミングよりも、IPテレビ会議のほうがより注目を集めていたような感じであった。また、名前は忘れたが、香港の企業も、ソフトウェアベースのIPテレビ電話を展示していた。ある担当者は、「IPテレビ電話がやはり本命でしょう。」と熱っぽく語っていたのが印象的だった。

また、ソフトウェアベースだけでなく、台湾メーカー、リードテックのテレビ電話も中国テレコムのブース(写真)などに展示され、簡単にテレビ電話ができますよと説明員がアピールしていた。

中国の多地点接続サービス

中国では多地点接続サービスは、外国企業が純粋に事業として行なえない法的な理由が

あるため、中国の地元の電気通信事業者がサービスを提供している。ただ、冒頭でも述べたように、IPテレビ会議しかおこなっていないようである。ISDNはインフラ的にはまだまだのようで、逆にIPネットワークの構築が急ピッチで展開されている現状を示しているのであろうか。

ポリコムで話を聞いた後に行ったチャイナ・ユニコム(左写真)はブースでは、同社のサービスである多画面分割のデモを行っていた。画面の下に見える端末は、Huawei社のテレビ会議、ViewPoint。

また、会場では見かけなかったが、中国では、チャイナ・レイルコムも同様な多地点サービスを提供しており、確認はできなかったが、ISDNとのゲートウェーサービスも、主なサービスであるIPテ



レビ会議多地点接続サービスに加えて提供されているようだ。感じとしては、チャイナ・レイルコム以外は、純粋にIPテレビ会議接続だけのようで、電話会議やISDNベーステレビ会議多地点などは行っていないようだ。今後中国国内のインフラの整備によっては提供されるようになるのかもしれないが、現時点で、会場で話をいろいろな人に聞いた範囲ではIPだ

けのようだ。

加えて会場では見かけなかったが、北京ユニコムも新たにIPテレビ会議を開始したようだ。中国では電気通信事業者が7社あると聞いたが、ある香港人によると、今サービスを開始していても、近い将来開始する可能性はある、最終的には全7社かIPテレビ会議を行うかもしれないと言っていた。

*Huaweiのテレビ会議端末(写真下)、MCU(写真上)

中国のテレビ会議メーカー、HuaweiとZTE

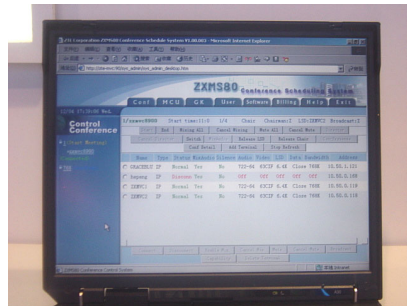
中国には、複数のテレビ会議メーカーがあるようだが、今回のITUではHuaweiとZTEが、テレビ会議製品を出展していた。HuaweiやZTEは、テレビ会議専門のメーカーではなく、主要な製品は交換機やネットワーク関連の機器が主な取り扱いだが、最近ではテレビ会議端末製品も自社開発しつつあるようで、中国では、

この Huawei と ZTE が同国内のテレビ会議メーカーでは双壁と見られているような話を聞いた。ただ、Huawei では、テレビ会議関連の売上は、全体の売上の 5% 程度とまだまだ社内では主要事業の位置づけではないようだ。

しかしいずれにしても、Huawei、ZTE とも今後力を入れていく事業とはっきり言っていたので、近い将来面白い展開が市場で見られるかもしれない。

Huawei は、年間売り上げが 31 億ドル、全世界 32 箇所に拠点を持つ国際企業で電気通新関連の製品の開発、製造を行なっている。

その中でテレビ会議開発製造している。単にテレビ会議端末 (ViewPoint) だけでなく、左写真の MCU (多地点接続装置、ブルーの筐体と上にちよこんと乗っている緑色の MCU の 2 台)、ゲートウエー、ゲートキーパー、テレビ会議ネットワーク管理ソリューションまで幅広く提供している。中国人のプロダクトマネージャー ビクター・チュー氏 (英語名刺) いろいろと説明してくれた。彼はちょうど日本への出張から帰ってきたところで、日本のテレビ会議市場にも参入を是非したいと現在検討しているようだ。



また、その後、ZTE のブースにも行き、そこで海外市場担当の張蓉氏に製品概要を説明してもらったが、ZTE も、テレビ会議端末 (左写真)、パソコンタイプのものから、MCU、ゲートウエー、ゲートキーパー、テレビ会議ネットワーク管理ソリューションまで幅広く提供している。また、MPEG-2 コーデックや遠隔教育に特化したソリューションも扱っている。

同社は、Huawei と同じネットワーク系の交換機などが主な事業のようである。ここ最

近テレビ会議にも力をいれているようで、すでにアメリカには同社のテレビ会議端末のユーザーがいるそうだ。張蓉氏によると、「私どもは、海外 20 カ国で事業展開していますが、アメリカでは私どものテレビ会議のソリューションを導入していただいているところがありますが、日本については未定です。」

ちなみに、ZTE の PC タイプのテレビ会議の定価は、1 万円 (約 15 万円)、セットアップタイプが、11 万 5000 円 (約 150 万円)、PE G-2 コーデックが、25 万円 (約 300 万円)。

ZTE

(写真上) テレビ会議端末、(写真中央) MCU、(写真下) 端末管理ソフトウェア

ワールドコム・コンファレンシング・アジア

ワールドコムは、今回の ITU には参加していないが、電話会議、テレビ会議、データ会議などの多地点サービスを提供する大手通信会社ワールドコム・コンファレンシング・アジア、マネージング・ディレクターのジェレミー・ヒルバーン氏、ワールドコム・コンファレンシング・アジアの最高責任者に当たる人で、香港のオフィスにてお話を伺う機会がもてた。彼によると、アジア太平洋地区では、オーストラリアの電話会議サービスが今一番伸びているようだ。日本は、オーストラリア、香港、シンガポールに比べるとまだ電話会議利用のボリュームが小さいようだが、最近では、特にインベスターズ・リレーション関係での利用が増えている様子で、日本市場もポテンシャルな面から見て有望な市場だと思っておっしゃっていた。

中国については、非常に興味を持ちつつ現在市場のポテンシャル性など研究中とのこと。

また、今年から、日本のカントリーマネージャーとして、ローン・フェゼック氏を起用。同氏は日本に 10 年ほど住んでいるようで、日本語は達者。ローンフェゼック氏は、先月、ジェレミー・ヒルバーン氏が、私が香港から帰国した翌週には来日したので、その際にワールドコムジャパンのオフィスでお会いした。フェゼック氏からは今後の対日市場におけるビジネス戦略についてお話を伺った。

コンピューネティクス社

テレビ会議にも対応しているが、特に音声会議を意識した MCU 関係の製品を開発製造するアメリカのコンピューネティクス社は、現在香港にオフィスを構えており、ソニア・スー氏、事業開発担当マネージャーとして日々アジア各国へ飛び回り、忙しい日を送っている。彼女の上司は、ドン・コルディック氏で彼は今オーストラリアを拠点に同じくアジア太平洋地区を飛び回っている。今回香港に訪問するにあたり、ソニア・スー氏にコンピューネティクス社の、製品

概要やビジネス戦略などを伺った。最近の話だと、インスタント・メッセージングを利用してMCUをコントロールする仕組みを設けたりしてユーザーフレンドリーなシステム開発を心がけているそうだ。また、ハイエンドMCUとして、Contex Summit もリリースし、これは 9600 ポートまで対応する非常に大型な装置。この装置を利用してサービスを提供することを考えているサービスプロバイダーなどを意識しており、また、音もハイクオリティを意識した機能となっているため、この Summit を利用した電話放送というのも可能だ。

コンピュネティクス社は、現在NTT-MEが日本での代理店になっている。非常に高性能で、安定性が優れたMCUを開発しており、アメリカの政府機関も利用しているくらい信頼性が高いシステムを同社は開発、全世界に販売している。販売実績としては、20カ国に、15万MCUポートをすでに設置している。アジア太平洋地区では、オーストラリアと香港にオフィスがあり、同地区で昨年は、ソニア・スー氏によると 2500 ポート以上販売、今年 2003 年も電話会議のニーズは増えると思っている。また、同氏によると、インドと中国は、電話会議の“眠れる巨人”と見ていて、今後両国でも電話会議は大きく伸びるとも予想している。日本市場も電話会議が伸びていると同社では見ており、今後日本市場へのコミットメントも増大させるようだ。

(各社のホームページ)

Polycom <http://www.polycomasia.com>
Aethra <http://www.aethra.it>
Hutchison <http://www.hgc.com.hk>
ZTE <http://www.zte.com.cn>
Huawei <http://www.huawei.com>
Worldcom <http://www.worldcom.com/asiapac/>
Compunetix <http://www.compunetix.com>

(各社担当者) * 英語のみ

Zhou Xiao Dong zhou.xiaodong@polycom.com
Roberto Giamagli r.giamagli@aethra.it
Corrado Mazzocato mazzocato@aethra.com
Chung Wai, Tony tonycw@hgc.com.hk
Rong Zhang Zhang.rong@mail.zte.com.cn
Victor Chu chusinhui@huawei.com
Jeremy Hilburn hilburn.jeremy@wcom.com.hk
Lorne Fetzek fetzek.lorne@wcom.co.jp
Don Kordick kord@compunetix.com.au
Sonia Soo soniasoo@compunetix.com.hk

CNA Report 編集長 橋本 啓介 kay@rr.ij4u.or.jp
TeleSpan (米) コントリビューティング・エディタ ジャパン
Videoconferencing Insight (英) 日本担当通信員
<http://www.hkeis.jp>

CNA Report

Conferencing News & Analysis

Independent & Unbiased Perspective
Since December, 1999
By Keisuke Hashimoto